

ISBN 978-4-903875-24-8

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 21

ユーラシア諸言語の動態 III —言語の多様性と類型と混成言語—

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2019 年 12 月発行

Dynamics in Eurasian Languages III: —Diversity, Typology and Mixed language—

Kobe City College of Nursing / Consortium for the Studies of Eurasian Languages

(December 31, 2019), pp. 97-124.

北部ビルマ下位語群の言語ランスー語の借用語

On Borrowed Words in Lhangsu, an Undescribed Northern-Burmish Language

澤田 英夫

SAWADA, Hideo

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa,

Tokyo University of Foreign Studies)

北部ビルマ下位語群の言語ランスー語の借用語

澤田 英夫

キーワード：ランスー語, ビルマ語群, 借用, ジンポー語, シャン語

はじめに

ランスー Lhangsu は、民族文化集団カチンを構成する民族の1つロンウォー Lhaovo の下位集団の名称である。ランスーは標準ロンウォー語とはかなり異なる言語を話す。ランスーの人々の置かれた民族地理的な環境により、ランスー語はジンポー語・ビルマ語・シャン語などの言語から多くの語彙を借用した。その度合いは、標準ロンウォー語がジンポー語からの借用語を受容したよりもずっと高いものと思われる。

本論文の目的は、ランスー語に入った借用語を、借用の経路とランスー語の音素目録に与えた影響の観点から概観することである。

1 ロンウォー人

ロンウォー人は主としてミャンマー連邦共和国のカチン州・シャン州、および中国雲南省に居住する。カチン州内では、彼らは元来ソーロー郡とチーブウェー郡のンマイカ川流域に住んでいたと考えられる。

ロンウォー人の中国における人口は約 5600 人 (戴, 2005, p.3), ミャンマーにおける人口は約 10 万人である (Lhaovo Littero-Cultural Committee, undated, p.1)。

最近までこの民族は、ジンポー語およびビルマ語の呼称であるマル Maru という名称で言及されてきた。中国では彼らは浪速 Làngsù という名称で呼ばれている。この名称は明らかに彼らの自称ではなく、また本研究で取り扱う言語およびその話者集団の名称ランスーに非常に似通っている。

1.1 ロンウォー人によって話される言語変種

ロンウォー人たちの話す言語にはいくつかの変種があることがわかっている。これらの変種の多くは元来カチン州東部のソーロー郡で話されてきたが、ランスー語だけはカチン州中央部のスムプラブム郡で話されてきた。

これらの変種全ては、チベット=ビルマ系のロロ=ビルマ語支ビルマ語群の北部下位語群に属すると考えられる。図 1 はカチン州でロンウォー人が話す言語変種のうち

筆者がこれまで確認し得たものの分布を示した地図である。合わせて、北部ビルマ下位語群に属する他の言語の分布も示している。

ラウンビツ=ダゴツ Laungbyid-Dago? (狭義のロンウォー語) 自称 /laun^F pjit^F tãko^F/.
ソーロー郡とその南のチーブウェー郡で話される。ロンウォー人が話す言語のうち標準的なものであるとみなされている。以下では、この変種を単にロンウォー Lhaovo (Lhv.) と言及する。

ワカウツ Wakhaug 自称は未確認*1。Lhv. /vãk^h auk^H/.
元来、ソーロー郡北部のンマイカ川西岸にあるワセー Wase やワミツ Wamyit などの村で話されてきた。

トッラン Tho?lhang 自称 [t^ha[?]21 lɔ²²]. Lhv. /t^ho[?]H l'oy^F/.
元来、ンマイカ川東岸のトッラン Htaw Lang 及び周辺の数ヶ村で話されてきた。

ラキン Lakin 自称 [lã² kɛ²²]. Lhv. /lãk'in^F/.
元来、トッラン村からさほど遠くないラキン Lakin 村で話されてきた。トッラン変種に近い。

ランスー Lhangu 自称 [lãŋ⁵³ su⁵³]. Lhv. /l'oy^F su^F/.
ランスーの人々は、他のロンウォー人の居住地域から遠く離れたスンプラブム郡の数ヶ村に、周囲をジンポー人に取り囲まれて居住してきた。



図1 カチン州における北部ビルマ下位語群諸言語の分布図 (Sawada 2018, p.383 の地図を若干修正した。)

*1 筆者の調査に協力して下さったこの変種の話者は、本来の発話地域から離れた場所に移住して数代を経ており、自らを非標準ロンウォー語話者の総称であるギャノツ Gyanno? であると語った。Lhv. /vãk^h auk^H/ の名称は現地の有識者にご教示いただいたものであるが、この有識者もこの変種の話者でなく、自称は不明のままである。

2 ランスー語の音韻論

借用語の実例を考察する前に、ランスー語の音韻論を概観する*2。

ランスー語の最小の完全音節は、母音 V と声調 T からなる。多くの場合には頭子音 C_i が生起する。また、末子音 C_f も生起し得る。

頭子音と母音の間に起こる要素は2類に分類される。/j/と/r/は特定の頭子音とのみ結びつくため、これらを介子音 C_m に分類する。一方、/w/は特定の母音とのみ結びつくため、これを母音入り渡りの W に分類する。

成音節鼻音が声調を伴って音節を形成することもあるが、多くは借用語に見られ、ランスー語固有語の例は非常に稀である。

(1) ランスー語の音節構造 # Sawada (2018, p.383) を修正

$$\begin{cases} (C_i(C_m))(W)V(C_f)/T \\ N_s/T \end{cases}$$

C_i : 頭子音, C_m : 介子音, W: 母音の入り渡し, /w/, V: 母音, C_f : 末子音, N_s : 成音節鼻音 /m/, T: 声調。

表1はランスー語の頭子音音素および頭子音+介子音音素連続の体系を示したものである。

調音部位と調音方法を同じくする子音3つ組のうち、最初のもが無気音、2つ目のアポストロフィを伴うものがさしみ音、最後の上付き^hを伴うものが有気音である。類似の指定が、調音部位と調音方法を同じくする子音2つ組にも当てはまる。ただし、軟口蓋摩擦音は1つ目が有声音、2つ目が無声音である。

表1 ランスー語の頭子音

Sawada (2018, p.385) で /ts, ts', s/ を DENTAL にしていたのを ALVEOLAR に改めた。

ボールドにした頭子音音素はランスー語固有語に出現し得る。

	LABIAL	ALVEOLAR	PALATAL	VELAR	GLOTTAL
NASAL	<i>m/m'</i>	<i>n/n'</i>	<i>ɲ</i>	<i>ŋ/ŋ'</i>	
STOP	<i>p/p'/p^h</i>	<i>t/t'/t^h</i>		<i>k/k'/k^h</i>	<i>ʔ</i>
AFFRICATE		<i>ts/ts'</i>	<i>tʃ/tʃ'/tʃ^h</i>		
FRICATIVE	<i>f</i>	<i>s</i>	<i>ʃ</i>	<i>ɣ / x</i>	<i>h</i>
LATERAL		<i>l/l'</i>			
FLAP		<i>r</i>			
APPROXIMANT	<i>w</i>		<i>j/j'</i>		
with a medial consonant	<i>pj/p'j/p^hj</i>			<i>kj/k'j/k^hj</i>	
-j-	<i>mj/m'j</i>				
-r-	<i>mr</i>			<i>kr</i>	

*2 ランスー語の調査協力者は、1950年にミャンマー連邦共和国カチン州スムプラブム郡の /təŋ²² ka²²/ 村で生まれた男性である。この村の所在を特定することはできなかったが、調査協力者によると、この村は La Hkaw Ga 村 (97.974E, 26.648N, Myanmar PCodes) や Hkin Dawng 村 (98.018E, 26.641N, ibid.) に近いという。1973年に州都ミッチーナの郊外に移り住んで現在に至る。

ランスー語の頭子音体系を他のビルマ語群北部下位語群の言語のそれと比べてみたときに特徴的な点は、歯茎破擦音と硬口蓋鼻音が固有語に現れないことである。これらの音素は借用語にのみ現れる。

ランスー語の頭子音は3つの系列に分けられる。

1. 無気音系列 **PLAIN series** 無気の閉鎖音・破擦音、普通の鼻音・接近音・側面音、弾き音、それに有声の摩擦音からなる。
2. きしみ音系列 **CREAKY series** きしみ音の閉鎖音・破擦音・鼻音・接近音・側面音、それに声門閉鎖音からなる。
3. 有気音系列 **ASPIRATED series** 有気の閉鎖音・破擦音と無声の摩擦音からなる。

表2 ランスー語の頭子音音素の3系列

PLAIN	<i>p-, t-, ts-, tʃ-, k-, m-, n-, ɲ-, ŋ-, l-, j-, r-, w-, y-</i>
CREAKY	<i>pʰ-, tʰ-, tsʰ-, tʃʰ-, kʰ-, ʔ-, mʰ-, nʰ-, ŋʰ-, lʰ-, jʰ-</i>
ASPIRATED	<i>pʰ-, tʰ-, tʃʰ-, kʰ-, f-, x-, s-, ʃ-, h-</i>

表3は、ランスー語の韻の一覧である。

ランスー語は6つの母音音素 /i, e, a, o, u, ə/ を持つ。このうち /ə/ は閉音節か弱音節にしか現れない。末子音音素は /-w, -j, -m, -p, -n, -t, -ŋ, -ʔ, -k/ の9つである。固有語に限って言えば、 /-ʔ/ と /-k/ は相補分布を示す。

これもランスー語固有語に限ってのことであるが、各末子音音素は最大で4種類の母音音素と共起する。母音音素の側から見ると、末子音音素との共起制限にばらつきが見られることがわかる。例えば、 /a/ は固有語で /-k/ を除く全ての末子音音素と共起できる。一方、 /e/ は固有語でいかなる末子音とも共起しない。

表3 ランスー語の韻

Sawada (2018, p.388) をもとに、それ以降に得たデータによって拡張し再配列した。

末子音音素を伴わない ə は弱音節のみに現れる。

ボールドにした頭子音音素はランスー語固有語に出現し得る。

	-w	-j	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-ʔ	-k
<i>i</i>			<i>im</i>	<i>ip</i>	<i>in</i>	<i>it</i>	<i>iŋ</i>	<i>iʔ</i>	<i>ik</i>
<i>e</i>			<i>em</i>	<i>ep</i>	<i>en</i>	<i>et</i>	<i>eŋ</i>	<i>eʔ</i>	
<i>a</i>	<i>aw</i>	<i>aj</i>	<i>am</i>	<i>ap</i>	<i>an</i>	<i>at</i>	<i>aŋ</i>	<i>aʔ</i>	<i>ak</i>
<i>o</i>		<i>oj</i>	<i>om</i>	<i>op</i>	<i>on</i>	<i>ot</i>	<i>oŋ</i>	<i>oʔ</i>	<i>ok</i>
<i>u</i>			<i>um</i>	<i>up</i>	<i>un</i>	<i>ut</i>	<i>uŋ</i>	<i>uʔ</i>	<i>uk</i>
<i>ə[#]</i>			<i>əm</i>	<i>əp</i>	<i>ən</i>	<i>ət</i>	<i>əŋ</i>	<i>əʔ</i>	<i>ək</i>
<i>wi</i>									
<i>we</i>									

(*awŋ*)

母音入り渡りの /w/ は前母音音素 /i, e/ とのみ共起する。この入り渡りは、少なくとも固有語では開音節のみに現れる。

表4はランスー語の声調のリストである。3つの下降調21と53は、固有語に関する限り、頭子音との間に共起制限を示す。21調は主に無気音系列の子音と共起し、一方53調は主に無気音系列以外、すなわちきしみ音系列・有気音系列の子音と共起する。

表4 ランスー語の声調

- 21 主として無気音系列の頭子音と共起する。22調の後でしばしば調値31を取る。
 53 ほとんどきしみ音系列および有気音系列の頭子音と共起する。
 22
 55 35で実現することもある。

ビルマ語 (Okell, 1969, p.5) やロンウォー語 (Sawada, 1999, p.107) など他のビルマ語群の言語と同様に、ランスー語も弱音節を持つ。弱音節は弱く短く発音される。弱音節のあるものは、本来完全音節であったものが弱化を被った結果生じたものである。全ての弱音節は開音節であり、母音の多くは /a/ か /ə/ である*3。弱音節は母音の上に \sim を付して表記し、調値は1桁の数字で示す。

3 借用元の言語

本節では、ランスー語の借用語をその借用元ごとに考察する。
 以下の節に挙げた各借用語項目は次のような内容からなる。

ランスー語形式 (斜体) ‘英訳’. [構成要素の意味] 《語源情報》.

#ただし、構成要素の意味は全ての項目に対して与えられているわけではない。

本稿で用いる言語名略号 (一部略号でないものを含む) は以下のとおりである。

Bur.	標準ビルマ語	Lhv.	ロンウォー語
Chn.	漢語	Pali.	パーリ語
Dehong.	徳宏タイ語	Rawang.	ラワン語
Eng.	英語	Shn.	シャン語
Hindi.	ヒンディー語	Skt.	サンスクリット語
Jhp.	ジンポー語 (std. 標準, non-std. 非標準)	Trung (Dulong).	トゥルン語
Lhs.	ランスー語	WB.	現代ビルマ語ビルマ文字 表記の綴字転写

3.1 ジンポー語

周囲をジンポー人居住地域に囲まれるというランスーの民族地理的環境から見て、ランスー語の最も有力な借用元がジンポー語であることは驚くに当たらない*4。

*3 /a/ は本来の弱音節に多く現れる。/ə/ は弱化を被った音節に多く現れるが、それ以外の母音が現れることもある。

*4 ジンポー人はランスーをジンポーの一派だとみなしてすらい。もちろん言語系統的にはこれは正しくない。

ジンボー語形式を判定する際のソースとしては、Maran (1979), Kurabe (2018) を用いた。表記には Kurabe (2016) の音韻表記を用いたが、声調表記をダイアクリティックから上付き文字に改めた。頭子音 (+ 介子音) 音素, 韻, 声調の目録を表 5-7 に挙げる。

表5 ジンボー語の頭子音

Kurabe (2016, p.23) Table 2.1 の Initial consonants の部分をもとに、本稿表 1 のフォーマットに合わせて再配列した*5。

	BILABIAL	ALVEOLAR	RETRO-FLEX	(ALVEO-) PALATAL	VELAR	GLOTTAL
NASAL	<i>m/?m</i>	<i>n/?n</i>			<i>ŋ/?ŋ</i>	
STOP	<i>b/p/ph</i>	<i>d/t/th</i>			<i>g/k/kh</i>	<i>ʔ</i>
AFFRICATE		<i>dz/ts</i>		<i>j/c</i>		
FRICATIVE		<i>s</i>		<i>ɕ</i>		<i>h</i>
LIQUID		<i>l/?l</i>	<i>r/?r</i>			
APPROXIMANT	<i>w/?w</i>			<i>y/?y</i>		
with medials	<i>by/py/phy</i>				<i>gy/ky/khy</i>	
-y-	<i>my/?my</i>	<i>ny/?ny</i>				
-r-	<i>br/pr/phr</i>				<i>gr/kr/khr</i>	

表6 ジンボー語の韻

Kurabe (2016, p.32) Table 2.6 をもとに、本稿表 3 のフォーマットに合わせて再配列した。

	-w	-y	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-ʔ	-k
<i>i</i>			<i>im</i>	<i>ip</i>	<i>in</i>	<i>it</i>	<i>iŋ</i>	<i>iʔ</i>	<i>(ik)</i>
<i>e</i>			<i>em</i>	<i>ep</i>	<i>en</i>	<i>et</i>	<i>eŋ</i>	<i>eʔ</i>	<i>(ek)</i>
<i>a</i>	<i>aw</i>	<i>ay</i>	<i>am</i>	<i>ap</i>	<i>an</i>	<i>at</i>	<i>aŋ</i>	<i>aʔ</i>	<i>(ak)</i>
<i>o</i>		<i>oy</i>	<i>om</i>	<i>op</i>	<i>on</i>	<i>ot</i>	<i>oŋ</i>	<i>oʔ</i>	<i>(ok)</i>
<i>u</i>		<i>uy</i>	<i>um</i>	<i>up</i>	<i>un</i>	<i>ut</i>	<i>uŋ</i>	<i>uʔ</i>	<i>(uk)</i>
<i>ə</i>									

表7 ジンボー語の声調

Kurabe (2016) の 調類	調値	表記	本稿の 表記
Low	[31]	Ṃ	L
Mid	[33]	V	M
High	[55]	Ṃ	H
Falling	[51]	Ṃ	F

*5 Kurabe (2016) の子音目録は調音部位の指定がなされていないので、本文中の記述をもとに調音部位ごとに分類した。その際、閉鎖音 /t, d, th/ と破擦音 /ts, dz/ の調音部位分類がいずれも Alveolar となっていたので、Stop と Affricate の行を分けた。

大量に確認されたジンポー語からの借用語のうち、一部を挙げる。

(2) ランスー語に入ったジンポー語の借用語

- ǎ²k^haŋ⁵⁵** *ju²¹-a²¹**6 ‘to take leave’.*7 [permission + take] 《Jhp. *ʔəkhaŋ^H* ‘permission’》
- ǎ²k^hjiŋ²²** ‘hour, time’. 《Jhp. *ʔəkhyiŋ^M*》
- ǎ²mju⁵⁵** ‘tribe’. 《Jhp. *ʔəmyu^H*》
- jom⁵⁵-a²¹** ‘to decrease’. 《Jhp. *yom^M*-》
- kǎ²sup⁵³-a²¹** ‘to play’. 《Jhp. *gəsup^H*- ~ *gin^Lsup^H*-》
- kam²¹tʃa²²-a²¹** ‘to be healthy’. 《Jhp. *gam^Lja^M* n. ‘good fortune, strong luck’》
- k^ha²¹-a²¹** ‘to dance’.*8 《Jhp. *ka^L*-》
- k^haŋ⁵⁵-a²¹** ‘to make’. 《Jhp. *khaŋ^H*- ‘to steer, to control, to direct the course of action’》
- k^huŋ²¹ran⁵⁵p^hoŋ⁵⁵** ‘wedding festival’. 《Jhp. *khuy^Lran^H* ‘to take marriage’ ; Jhp. *poy^H* ‘festival’》
- kjaŋ²¹** ‘very’. 《Jhp. *gray^L*》
- k^hjəŋ²¹-a²¹** ‘to stop’. 《Jhp. *khriŋ^L*- ‘to wait, to delay, to linger, defer, procrastinate’》
- laŋ²¹k^ha²²** ‘writing, letter, book’. 《Jhp. *lay^Lka^M*》
- lǎ²wan²²-a²¹** ‘to be fast, quick’. 《Jhp. *ləwan^M*-》
- mǎ²ya²²***9 ‘wound’. 《Jhp. *məra^L* ‘fault, guilt’》
- mjit²¹k^hju^m⁵³-a²¹** ‘to consent to, approve’. 《Jhp. *myit^L* ‘mind’*10; Jhp. *khrum^H*- ‘to meet’》
- nam²¹p^han²²** ‘flower’. 《Jhp. *nam^Lpan^M*》
- ŋa²²-nan²²** ‘myself’. 《Jhp. *nan^M*》
- nap²¹tʃ^hum⁵⁵** ‘morning, tomorrow’. 《Jhp. *nap^L* ‘early morning’》
- tən²¹-noŋ⁵⁵-a²¹** ‘to push’. [push*11-push] 《Jhp. *noŋ^H*-》

*6 -a²¹ はランスー語の情報授受文:肯定:現実の文標識である。これが付加され得ることを、この借用語がランスー語という言語の体系に含まれることの証拠とみなす。

*7 *ju²¹*- ‘to take’ は *Bur.yu^L*- WB. {yuu} と同源である。この表現自体、*Bur.ʔək^hwiŋ^Cyu^L*- WB. {@a khwang’. yuu} からの借用翻訳なのかもしれない。*Lhv.ʔək^hay^Hju^F*- も同様の構成を取る。

*8 おそらく *Bur.ka^C*-とは直接関連付けられない。ビルマ語と同源なら、音韻対応により形式 *ka⁵⁵*- が期待されるし、ビルマ語からの借用語であれば形式 *k^ha⁵³*- が期待される。ちなみに、ジンポー語有聲閉鎖音・摩擦音はランスー語借用語の無気音系列に、無声無気閉鎖音・摩擦音はきしみ音系列に、無声有気閉鎖音・摩擦音は有気音系列に対応する。

*9 音素 *y*- は固有語では西暦 13 世紀ビルマ語の **r*- WB. {r-} に対応し、ゆえにこの形式は借用語としては例外的である。ちなみに Bradley (2011) によると、バガン時代 (13 世紀) ビルマ語の **r*- は 18 世紀初頭までに /y/ に変化した。

*10 *Jhp.myit^L* はロンウオー語など他の北部ビルマ諸語にも借用され、psycho-collocation を形成するのによく用いられる。漢語「気」のようなものであろうか。cf. *Lhv.mjit^Fvaŋ^H*- [mind + approve]

*11 *Lhs.tən²¹*- ‘to push’ は *Lhv.təm^L*-, *Bur.tun^H*- WB. {t-wan’:} と同源。

- puŋ*²²*li*²¹-*ǎ*²*səŋ*⁵³ ‘host, master’. [work-master*¹²] 《Jhp. *buŋ*^L*li*^L ‘work, labour’》
- pjin*²¹-*la*²¹-*a*²¹ ‘to become, arise, be’. [happen-come*¹³] 《Jhp. *byin*^M- ‘to happen or chance, to take place or effect’》
- p’at*⁵³ ‘glass’. 《Jhp. *pat*^H ‘amber, glass, mirror’》
- saw*⁵⁵-*a*²¹ ‘to be soft’. 《Jhp. *saw*^L-》
- sən*²¹*pop*⁵³ ‘lung’. 《Jhp. *sin*^L*wop*^H》
- sǎ*²*ku*⁵⁵ ‘sheep’. 《Jhp. *səgu*^F》
- sǎ*²*ŋaw*²² ‘smell, scent’. 《Jhp. *sə*^L*ŋaw*^M》
- jut*⁵³-*a*²¹ ‘to be wrong’. 《Jhp. *εut*^H- ‘to err, make a mistake’》
- ǰə*²*tʃen*⁵³*no*²¹ ‘greeting, salute’. 《Jhp. *εəcen*^L》
- ǰəŋ*²¹*kan*²¹ ‘out, outside, exterior’. 《Jhp. *εiŋ*^L*gan*^L》
- tun*²²*səŋ*²² ‘worm, insect’. [worm-?] 《Jhp. *duŋ*^M》
- tʰoŋ*²¹-*a*²¹ ‘to kick’. 《Jhp. *thoŋ*^L-》
- tʃam*²¹*tʃaw*²¹ *kʰjum*⁵⁵-*a*²¹ ‘to suffer’. 《Jhp. *jam*^L*jaw*^L- ‘to be difficult or problematic’ ; Jhp. *khrum*^H- ‘to meet’》
- tʃo*²¹-*a*²¹ ‘to be right, correct’. 《Jhp. *jo*^L-》
- tʃʰom*⁵⁵-*a*²¹ ‘to hunt’. 《Jhp. *jom*^H- ‘to join forces, to co-operate, to plan and do in unison: to chase or drive game, as a party of hunters’》

いくつかの形式は、標準ジンポー語以外のジンポー語変種から借用されたに違いない。

- (3) 標準語以外のジンポー語変種からランスー語に借用されたと思われる語彙
- kəm*²¹*mraŋ*²¹ ‘horse’. 《non-std.Jhp.*¹⁴ *gum*^L(*m*)*raŋ*^L. cf. std.Jhp. *gum*^L*ra*^L》
- kəm*²¹*pʰjoŋ*²¹ ‘silver, money’. 《non-std.Jhp. *gum*^L*phroŋ*^L. cf. std.Jhp. *gum*^L*phro*^L》
- məʔ*²¹ ‘cloud’. 《non-std.Jhp. *mu*^{ʔL}- ‘to be cloudy’ cf. std.Jhp. *muŋ*^M》
- ǰəŋ*²¹*tʃen*²² ‘fish gills’. 《non-std.Jhp. *εiŋ*^L*jen*^M. cf. std.Jhp. *εiŋ*^L*gyeŋ*^M》

ジンポー語の子音音素は調音部位および調音法を同じくするランスー語の子音音素に対応し、母音音素も音色の近いランスー語の母音音素に対応する。例外として2点挙げる。

*¹² Lhs. *ǎ*²*səŋ*⁵³ ‘master’ は Lhv. *ǎsəŋ*^F と同源。

*¹³ Lhs. *la*²²- ‘to come’ は Lhv. *lo*^F-, Bur. *la*^L- WB. {*laa*} と同源。

*¹⁴ Maran (1979) ではこの形式を Hkauri 方言の形式であると記しているが、Gauri (Hkauri) 方言が話されるのはカチン州南部バモーの北東地域であり (Maran 1979 の *gauri* の項, および Kurabe 2016, p.15 の地図), この変種からランスー語が語彙を借用したとは考えにくい。Kurabe (2016, p.18) は、ジンポー祖語で散発的に現れる *-ŋ* が標準ジンポー語と Nhkum 方言だけには現れないことを示している。これらの語彙は、カチン州北方で話されるいずれかの方言から借用されたものとみてよい。語源情報に記された non-std.Jhp. は、この未確定の、ただ標準ジンポー語ではないことだけは確かなジンポー語変種を表すものと理解されたい。

1. ジンポー語の介子音 *-r-*, *-y-* は共にランスー語の *-j-* に対応する。
2. 閉音節において、ジンポー語の *i*, *u* の一部がランスー語の *ə* に対応する。

対応する頭子音がランスー語にない場合は、その子音自体を借入する。

ジンポー語の声調 *L* はランスー語の 21 に、*M* は 22 に、*H* は 55 か 53 におおむね対応する。ジンポー語の弱音節はランスー語でも弱音節として取り入れられる。

3.2 シャン語

西暦 14 世紀頃には、現在のカチン州全域はタイ系民族の勢力圏内にあったと考えられる。現在のカチン州に少なからず残るタイ系起源をもつ地名の存在がこのことを裏付ける (澤田, 2011) *15。このことを考えると、ランスー語にタイ系由来の借用語が確認されることも頷ける。

タイ系言語のうち借用元言語である可能性が最も高いシャン語形式を判定する際のソースとして、Sao Tern Moeng (1995) *Shan-English Dictionary* に基づいて構築された SEALang Library (2008) と Kurabe (2017) を用いた。

表8 シャン語の頭子音

SEALang Library (2008) の音韻表記を抽出し、表 1 のフォーマットに沿って配列した。

	LABIAL	DENTAL/ ALVEOLAR	RETRO- FLEX	PALATAL	VELAR	GLOTTAL
NASAL	<i>m</i>	<i>n</i>		<i>ɲ</i>	<i>ŋ</i>	
STOP	<i>p/p^h</i>	<i>t/t^h</i>			<i>k/k^h</i>	<i>ʔ</i>
AFFRICATE		<i>ts</i>				
FRICATIVE	<i>(f)</i>	<i>(θ) s^h</i>		<i>(ʃ)</i>		<i>h</i>
LATERAL		<i>l</i>				
APPROXIMANT	<i>w</i>		<i>r</i>	<i>j</i>		
with medials <i>-j-</i>	<i>mj</i>					
	<i>pj/p^hj</i>				<i>kj/k^hj</i>	
		<i>lj</i>				
<i>-r-</i>	<i>mr</i>					
	<i>pr/p^hr</i>	<i>tr</i>			<i>kr/k^hr</i>	
		<i>tsr</i>				
		<i>s^hr</i>				
<i>-w-</i>	<i>pw</i>	<i>tw/t^hw</i>			<i>kw/k^hw</i>	
		<i>lw</i>				

*15 都市に限っても、Mohnyin, Mogaung, Momauk, Kamaing, Nogmung, Mansi, Bhamo, Waingmaw, Namhkam, Sinbo, Hpakan, Putao などの例が見られる。

表9 シャン語の韻

Sealang Library Shan Dictionary Resources の音韻表記を抽出し、表3のフォーマットに沿って配列した。

	-w	-j	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k
<i>i</i>	<i>iw</i>		<i>im</i>	<i>ip</i>	<i>in</i>	<i>it</i>	<i>iŋ</i>	<i>ik</i>
<i>e</i>	<i>ew</i>		<i>em</i>	<i>ep</i>	<i>en</i>	<i>et</i>	<i>eŋ</i>	<i>ek</i>
<i>ɛ</i>	<i>ɛw</i>		<i>ɛm</i>	<i>ɛp</i>	<i>ɛn</i>	<i>ɛt</i>	<i>ɛŋ</i>	<i>ɛk</i>
<i>a</i>	<i>aw</i>	<i>aj</i>	<i>am</i>	<i>ap</i>	<i>an</i>	<i>at</i>	<i>aŋ</i>	<i>ak</i>
<i>aa</i>	<i>aaw</i>	<i>aaj</i>	<i>aam</i>	<i>aap</i>	<i>aan</i>	<i>aat</i>	<i>aanŋ</i>	<i>aak</i>
<i>ɔ</i>		<i>ɔj</i>	<i>ɔm</i>	<i>ɔp</i>	<i>ɔn</i>	<i>ɔt</i>	<i>ɔŋ</i>	<i>ɔk</i>
<i>o</i>		<i>oj</i>	<i>om</i>	<i>op</i>	<i>on</i>	<i>ot</i>	<i>oŋ</i>	<i>ok</i>
<i>u</i>		<i>uj</i>	<i>um</i>	<i>up</i>	<i>un</i>	<i>ut</i>	<i>uŋ</i>	<i>uk</i>
<i>u</i>			<i>um</i>	<i>up</i>	<i>un</i>	<i>ut</i>	<i>uŋ</i>	<i>uk</i>
<i>ɾ</i>			<i>ɾm</i>	<i>ɾp</i>	<i>ɾn</i>	<i>ɾt</i>	<i>ɾŋ</i>	<i>ɾk</i>
<i>au</i>								

表10 シャン語の声調

Sealang Library Shan Dictionary Resources 所収の語彙項目の発音表記は各音節の調類を伴っているが、各調類の調値に関する記載が見当たらない。下表は新谷 (2000, p.79) による。

調類	名称	調値
1	上昇調	[13]
2	低平調	[11]
3	中平調	[33]
4	高平調	[55]
5	下降調	[53]

3.2.1 シャン語 → ジンポー語 → ランスー語

シャン語起源の語彙の多くは、ジンポー語を経由してランスー語に借用されたと考えられる。

この借用過程は、I. シャン語 → ジンポー語、II. ジンポー語 → ランスー語の2段階に分けて考えることができる。

I. の段階でのシャン語とジンポー語の間に成り立つ音対応はジンポー語のシャン語由来借用語を包括的に扱った Kurabe (2017) で述べられている。II. の段階でジンポー語とランスー語の間に成り立つ音対応は、3.1 でみたケースに準ずる。

- (4) シャン語からジンポー語を経由してランスー語に借用されたとされる語彙 $p^h\ddot{a}^2ka^{22}\text{-}su^{53}$ ‘merchant, trader’. 《Jhp. $ph\ddot{a}ga^M$ ‘trade, caravan’ < Shn. kaa^5 ‘to trade’》

- k'at*⁵⁵ ‘market’.^{*16} 《Jhp. *gat*^H ‘bazaar, marketplace’ < Shn. *kaat*²》
- k^haw*²²*na*²¹ ‘field, acres, rice-field’. 《Jhp. *khaw*^M*na*^L < Shn. *k^haw*³ ‘rice’ ;
Shn. *naa*⁴ ‘rice field made so as to be irrigated; lowland rice field’》
- k^ho*²²*k^ham*⁵³ ‘king’. 《Jhp. *kho*^M*kham*^H < Shn. *hɔ²k^ham*⁴ ‘royal’^{*17}》
- k^hok*²¹ ‘enclosure’. 《Jhp. *khok*^L ‘small enclosure for cattle, pen’ < Shn. *k^hɔk*³》
- jak*²¹-*a*²¹ ‘to be difficult’. 《Jhp. *yak*^M- ‘to be difficult’ < Shn. *jaak*³》
- maj*²¹*saw*²¹ ‘paper’. 《Jhp. *may*^L*saw*^L < Shn. *maj*⁵ *s^haw*³ ‘slender piece of wood
or bamboo, either long or short; stick on which cotton cloth is hung, or is
stretched to dry after sizing’》
- tǎ²-mun*²¹ ‘ten thousand’. [one-ten.thousand] 《Jhp. *mun*^L < Shn. *mun*²》
- mun*⁵⁵*tan*²² ‘country, state, nation’. 《Jhp. *mung*^H*dan*^M < Shn. *mɿŋ*⁴ ‘country’ ;
Shn. *tan*⁴ ‘place’》
- pjan*²¹*t’aj*²² ‘hare, rabbit’.^{*18} 《Jhp. *praj*^M*tay*^H < Shn. *paaj*²*taaj*⁴》
- tǎ²-sen*²¹ ‘hundred thousand’. [one-hundred.thousand] 《Jhp. *sen*^L < Shn. *s^hen*²》
- nam*²¹*pan*²²-*sun*⁵³ ‘park’. 《Jhp. *nam*^L*pan*^M ‘flower’ ; Jhp. *sun*^H ‘garden’
< Shn. *s^hon*² ‘enclosure for cultivation, garden’》
- sut*⁵³ ‘mosquito curtain’. 《Jhp. *sut*^H < Shn. *s^hut*⁴ ‘bed curtain’》
- səm*⁵³-*a*²¹ ‘to be defeated, lose, fail’. 《Jhp. *sum*^H- < Shn. *s^hum*⁴》
- tu*²²*sat*²¹ ‘animal, beast’. 《Jhp. *du*^L*sat*^L < Shn. *to*²*s^hat*⁴》

シャン語の *ts* はタイ祖語の *ɕ, *ʃ に由来する (Li, 1977, pp.164–173)^{*19}。また、16世紀の『百夷館訳語』に記録された百夷語 A, B でタイ祖語 *ɕ, *ʃ に対応する子音として、西田 (1961) は *tʂ を再構している。(p.17) そうすると、シャン語で *ɕ, *ʃ → *ts* の音韻変化が起こったことになる。

以上の考察を踏まえると、ジンポー語がシャン語語彙を借用したとすれば、その段階でこの音は硬口蓋音であったと考えられる^{*20}。(5)の例では Jhp. *j*- < Shn. *ts*- という借用関係が示されているが、これは前述のような音韻変化を前提にしているものとして理解されたい。

^{*16} ここでは Jhp. *g*- が *k*- ではなく *k'*- に対応する。ひょっとしたら、シャン語から直接借用されたか、あるいは Lhv. *k'at*^H を経由して借用されたのかもしれない。

^{*17} Kurabe (2017) は、Shn. *h* から Jhp. *kh* への対応付けを音声的な母語化 *nativization* によって説明できるかもしれないと述べ、その理由を Jhp. *h* がジンポー語固有語の音韻体系の中で周縁的であり、間投詞か擬声語ぐらいにしか現れないとする。(p.139)

^{*18} 興味深いことに、Lhv. *pjan*^F*t'aj*^L も初頭の子音連続 *pj*- を持ち、この語彙がジンポー語から借用されたことを示す。ジンポー語で介子音 *r* が導入された経緯は謎である。

^{*19} ただし、Li (1977) では本稿の *ts* を *s* と記載している。

^{*20} そうでなければシャン語からジンポー語に借用された後で *ts* → *j* の音韻変化が起こったと仮定する必要が生じる。しかしこの仮定は受け入れがたい。ジンポー語に歯茎破擦音と硬口蓋破擦音の対立が存在するからである。

- (5) Shn.
- ts*
- : Jhp.
- j*
- の対応を示す語彙

tjaw²¹koŋ²¹ ‘hunter’. 《Jhp. *jaw^Lgoŋ^L* < Shn. *tsaw³koŋ³* ‘the owner of a gun; a musketeer’》

tjoj²² ‘scales, balance’. 《Jhp. *joy^M* ‘a balance, usually with a stone for a weight and a flat basket for the dish’ < Shn. *tsɔj⁵* ‘a viss’》

tfoŋ²² ‘umbrella’. 《Jhp. *joŋ^M* < Shn. *tsɔŋ³*》

以下の語は、シャン語ではなく徳宏タイ語に対応する形式が見られる。徳宏タイ語形式のソースとしても Kurabe (2017) を用いた。

- (6) 徳宏タイ語に対応する形式が見られる語彙

kom²² ‘vessel’. 《Jhp. *gom^M*. cf. Dehong. *kom³*》

p’at⁵⁵-kom²² ‘cup, glass’. 《Jhp. *pat^H* ‘glass’ ; Jhp. *gom^M*. cf. Dehong. *kom³*》

mo²²p’hji²² ‘beggar’. 《Jhp. *mo^Mphyi^M*. cf. Dehong. *mo²phi²*》

3.2.2 シャン語 → ランスー語

ランスー語形式に対応する形式がシャン語には見られるが、ジンポー語には見られない場合がある。これらの語彙はシャン語から直接借用されたものと考えるのが妥当なのではあるが、ランスーがシャン人と接触の機会を持ち得たかどうかには一抹の疑問が残る。

- (7) シャン語から直接ランスー語に借用された語彙

k’oŋ²¹pat²¹ ‘drum’. 《Shn. *kɔŋ²paat³maa⁵* ‘drum-beat-?’》

pəŋ⁵⁵-a²¹ ‘to compare’. 《Shn. *pəŋ²* ‘to compare; engage in rivalry, contest’
? < WB. {p-ruing’} ‘to contest’》

t^hoŋ⁵⁵p’a⁵³ ‘big bag’. *²¹ 《Shn. *t^hoŋ²paa⁴* ‘bag which is slung over the shoulder when carried, shoulder bag’》 cf. Jhp. *thuŋ^Mba^H* ‘bag, wallet’.

3.3 ビルマ語

ミャンマーの公用語であり、12世紀にさかのぼる文字資料を持つビルマ語も、有力な借用元の一つである。

ビルマ文字の成立時に各要素が表したと推定される音価と、現代標準ビルマ語の音価の間には少なからぬずれが見られ、ビルマ語が歴史的な音変化を被ったことを物語る。本稿では、現代標準ビルマ語の音韻形式を Bur. で、本来の音価を反映すると考え

*²¹ もしもこの語彙がシャン語からジンポー語を経由してランスー語に借用されたとすると、Jhp. *-u* : Lhs. *-o* の対応を説明できないため、この類に入れた。声調対応は不規則である。

られる現代ビルマ語ビルマ文字表記の綴字転写 transliteration を WB. で、それぞれ表す*22。

ビルマ語形式に関しては、*Myanmar-English Dictionary* (Myanmar Language Commission, 1994) および『緬漢詞典』(北京大学東方語言文学系緬甸語研究室, 1990)を参照した。

表11 標準ビルマ語の頭子音

	LABIAL	DENTAL	ALVEOLAR	PALATAL	VELAR	GLOTTAL
NASAL	<i>m/hm</i> [m̥]		<i>n/hn</i> [n̥]	<i>ñ</i> [ɲ̥]/ <i>hñ</i> [ɲ̥]	<i>ŋ/hŋ</i> [ŋ̥]	
STOP/ AFFRICATE	<i>b/p/p^h</i>	<i>T/(D)</i> [t̪]/([d̪])	<i>d/t/t^h</i> [dz]/[tɕ]/[tɕ ^h]	<i>j/c/c^h</i>	<i>g/k/k^h</i>	ʔ
FRICATIVE	<i>(f)</i>		<i>z/s/s^h</i>	<i>hy</i> [ɕ]		<i>h</i>
FRAP			<i>(r)</i> [r]			
LATERAL			<i>l/hl</i> [l]			
APPROXIMANT	<i>w/(hw)</i>			<i>y</i> [j]		
with medials -y- [j]	<i>my/hmy</i> <i>by/py/p^hy</i>		<i>ly</i>		<i>gy/ky/k^hy</i>	

表12 現代ビルマ語文字表記の綴字転写と標準ビルマ語音韻形式の対応関係：
頭子音 (+介子音)

WB.	Bur.	{c}	<i>s</i>	{p}	<i>p</i>	{y/r}	<i>y</i>
{k}	<i>k</i>	{ch}	<i>s^h</i>	{ph}	<i>p^h</i>	{y=h/r=h}	<i>hy</i>
{kh}	<i>k^h</i>	{j/h}	<i>z</i>	{b}	<i>b</i>	{l/L}	<i>l</i>
{g/gh}	<i>g</i>			{bh}	<i>b/p^h</i>	{l=h}	<i>hl</i>
{ng}	<i>ŋ</i>	{t/T}	<i>t</i>	{m}	<i>m</i>	{w}	<i>w</i>
{ng=h}	<i>hŋ</i>	{th/Th}	<i>t^h</i>	{m=h}	<i>hm</i>	{w=h}	<i>hw</i>
		{d/dh/D/Dh}	<i>d</i>			{s}	<i>T/D</i>
{k-y/k-r}	<i>c</i>	{n}	<i>n</i>	{p-y/p-r}	<i>py</i>	{h}	<i>h</i>
{kh-y/kh-r}	<i>c^h</i>	{n-h}	<i>hn</i>	{ph-y/ph-r}	<i>p^hy</i>	{@}	ʔ
{g-y}	<i>j</i>			{b-y/b-r}	<i>by</i>		
{N~/n~/ng-r}	<i>ñ</i>			{m-y/m-r}	<i>my</i>		
{N~/h/ng=h-r}	<i>hñ</i>			{m-h-y/m-h-r}	<i>hmy</i>		

*22 ここに示したビルマ文字のローマ字転写は、おおむねビルマ文字で表記された上座部仏教の經典語パーリ語の音価をもとに筆者が考案したものである。インドからアリア系言語の經典を書き表す文字として伝来したブラーフミー系の文字を東南アジア諸民族が受容し、自言語を書き表すために流用したという経緯を考えると、このような転写の設定は妥当なものであると考える。なお、綴字転写とビルマ文字との対応については、澤田(2011)を参照されたい。

表13 標準ビルマ語の韻

	-N	-ʔ	with on-glide -w-		
<i>i</i>	<i>iN</i>	<i>iʔ</i>	(<i>wi</i>)	<i>wiN</i>	(<i>wiʔ</i>)
<i>e</i>			<i>we</i>		
<i>ε</i>		<i>εʔ</i>	<i>wε</i>		<i>wεʔ</i>
<i>a</i>	<i>aN</i>	<i>aʔ</i>	<i>wa</i>	(<i>waN</i>)	
<i>ɔ</i>					
<i>o</i>					
<i>u</i>	<i>uN</i>	<i>uʔ</i>			
	<i>eiN</i>	<i>eiʔ</i>			
	<i>aiN</i>	<i>aiʔ</i>		(<i>waiN</i>)	
	<i>aun</i>	<i>auʔ</i>			
	<i>oun</i>	<i>ouʔ</i>			

表14 現代ビルマ語文字表記の綴字転写と標準ビルマ語音韻形式の対応関係：韻

WB.	Bur.	{i/ii}	<i>i</i>	{e}	<i>e</i>	{=wa/=waa}	<i>wa</i>
{a/aa}	<i>a</i>	{in'/im'}	<i>ein</i>			{=way'/=waY}	<i>wε</i>
{an'/am'/aM}	<i>aN</i>	{it'/ip'}	<i>eiʔ</i>	{o/o'}	<i>ɔ</i>	{=wak'}	<i>wεʔ</i>
{at'/ap'}	<i>aʔ</i>			{ong'}	<i>aun</i>	{=wang'}	<i>wiN</i>
{ay'/aY}	<i>ε</i>	{u/uu}	<i>u</i>	{ok'}	<i>auʔ</i>	{=wan'}	<i>uN</i>
{ak'}	<i>εʔ</i>	{un'/um'/				{=wam'/=waM}	
{ang'/an~'}	<i>iN</i>	uM}	<i>oun</i>	{ui}	<i>o</i>		<i>uN/waN</i>
{ac'}	<i>iʔ</i>	{ut'/up'}	<i>ouʔ</i>	{uing'}	<i>ain</i>	{=wat'/=wap'}	<i>uʔ</i>
{aN~'}	<i>i/ε/e</i>			{uik'}	<i>aiʔ</i>		

表15 標準ビルマ語の声調

調類	調値	本稿での表記
Level	[V ²²]	<i>L</i>
Heavy	[V ⁴⁴]	<i>H</i>
Creaky	[Y ⁴¹]	<i>C</i>

声門閉鎖末子音を持つ閉音節は声調の対立を持たないため、その表記は声調表記を伴わない。

3.3.1 ランスー語がビルマ語とのみ語彙を共有する場合

ランスー語とビルマ語が似通った形式・意味を持つ語彙を共有し、それに対応する形式がジンポー語やシャン語に見られない場合、その語彙は近年になってビルマ語から直接ランスー語に借用された可能性が高い。

- (8) ビルマ語からランスー語に直接借用されたと考えられる語彙
ă²k^hun²² sawŋ²²-a²¹ ‘to pay tax’. 《Bur. ʔăk^huⁿ^L WB. {@a_kh-wan’} ‘tax’ ;
 Bur. s^hauⁿ^L- WB. {chong’} ‘to carry out’》
ă²t^u⁵³ khaw²²*23-a²¹ ‘to imitate’. [imitation + rely] 《Bur. ʔătu^C WB. {@a_tu.}
 ‘imitation’》
k^ha²¹k^hwe²¹-a²¹ ‘to defend’.*24 《Bur. ka^Lgwε^L- WB. {kaa_kway’}》
k^hă²lon²²tan²² ‘pen’. 《Bur. kălauⁿ^Ldan^L WB. {ka_long’taM’}》
k^hă²t^u⁵⁵ ‘ferry’. 《Bur. gădo^C WB. {ku_tui.}》
k^he⁵⁵tʃ^hun²¹tʃ^hun²¹-a²¹ ‘to shave, sharpen (pencils)’.*25 《Bur. c^huⁿ^L-
 WB. {kh-y-wan’}》
mji⁵⁵t^ha⁵⁵ ‘train’. 《Bur. mi^Hyă^th^a^H WB. {mii:ra_thaa:}》
p^hjin²¹-a²¹ ‘to repair, mend’. 《Bur. pyiⁿ^L- WB. {p-rang’}》
p^hje²²-a²¹ ‘to release, untie’. 《Bur. p^hye^L- WB. {ph-re’}》
si⁵⁵k’an⁵⁵ laj²²-a²¹ ‘to violate’. [rule + go.beyond*26] 《Bur. si^Hkan^H
 WB. {caN~’:kam’} ‘rule’》
t’an⁵⁵si²²-a²¹ ‘to line up, dispose’. 《Bur. tan^Hsi^H- WB. {tan’:cii:}》
ya^ʔ²¹-ɾu⁵⁵-tʃ^o²² ‘fried egg’. [chicken-egg*27-fry] 《Bur. cɔ^L WB. {k-rɔ’} ‘to fry’》

3.3.2 ビルマ語の他にシャン語（・ジンポー語）と借用形式を共有する場合

ランスー語・シャン語（時にはジンポー語も）が似通った形式・意味を持つ語彙を共有し、それがビルマ語の形式に関連付けられるケースは、以下の3つに分類される。

A. 現代標準ビルマ語の音韻形式に似た形式を持つ語彙 3.3.1 同様、ランスー語がその語彙を借用したのは比較的最近のことであろうと思われる。借用がシャン語（やジンポー語）を経由して行われたか、あるいは直接行われたか、確かなことは言えない。

- (9) **k^ho²²** ‘paste’. 《Bur. kɔ^L WB. {ko’}》 cf. Shn. kɔ²
p^hjo²²-a²¹ ‘to enjoy’. 《Bur. pyɔ^L- WB. {p-yo’}》 cf. Jhp. pyo^M-, Shn. pjɔ²

*23 Lhs. khaw²²- ‘to rely’ は Lhv. k^huk^H-, Bur. k^ho^H- WB. {khui:} と同源。

*24 第2音節の初頭音は、現代標準ビルマ語形式で有声音であるのに対し、ランスー語形式ではきしみ音となっている。そのため、一見すると子音の発声タイプにミスマッチが生じているように見えるかもしれない。ただし、現代標準ビルマ語形式のこの有声音は有声化の結果生じたものである。ビルマ語方言の中にも有声化を起こさないものが存在する。また、この地域の非ネイティブが話すビルマ語にも似たような傾向が見られる。ランスー語がその種のビルマ語からこの形式を借用したことは十分あり得ることである。‘ferry’についても同じことが当てはまる。

*25 Lhs. k^he⁵⁵ は Bur. k^he^Htan^L ‘pencil’ の第1音節に由来し、Lhs. tʃ^hun²² は Bur. c^hun^L ‘to sharpen to a point’ に由来する。k^he⁵⁵ は tʃ^hun²² の最初の生起と共に複合名詞を形成し、それが tʃ^hun²² の2回目の生起と N+V 熟語を形成する。文字どおりに解すると ‘to sharpen pencil sharpening’ となる。この種の N+V 熟語はロンウオー語にもよく見られる。

*26 Lhs. laj²²- ‘to go beyond’ は Lhv. laj^F- と同源。

*27 Lhs. ya^ʔ²¹ ‘chicken’ は Lhv. yɔ^ʔ^F, Bur. cε^ʔ WB. {k-rak’} と同源。Lhs. ɾu⁵⁵ ‘egg’ は Lhv. ɾau^H, Bur. ɾu WB. {u} と同源。

B. 現代標準ビルマ語の音韻形式でなく、綴字転写に似た形式を持つ語彙 前述のとおり、綴字転写はビルマ文字各要素の本来の音価をある程度反映していると考えられる。このことは当該形式が古い段階にビルマ語からシャン語（・ジンポー語）を経由してランスー語に借用されたことを示唆する。

- (10) ηa^{21} - $t'a^{22}$ * 28 - a^{21} 'to entrust'. [hand.over-put] 《Jhp. ηa^{21} - 'to hand over, commit, deliver' < Shn. $\eta a a^{21}$ < WB. { $@ap$ '} 'to entrust, to enroll'》
cf. Bur. ηa^{21} -
 $k^h j a m^{55} s a^{22} a^{21}$ 'to be at ease, comfortable, easy'. 《Jhp. $k^h y a m^H s a^L$ -
< Shn. $k^h j a a m^4 s^h a a^2$ 'to be easy, happy' < WB. { kh -yam':saa' 'to be rich; to have peace and quiet'》 cf. Bur. $c^h a n^H D a^L$ -
 $p'a \eta^{22} l a j^{22}$ 'sea'. 《Jhp. $p a \eta^M l a y^M$ < Shn. $p a a \eta^2 l a a j^2$ < WB. { $p a n g^l a y$ }》
cf. Bur. $p i n^L l e^L$
 $s a^2 t'a \eta^{55} t j a^{21} a^{21}$ 'to achieve fame'. [reputation + exist* 29] 《Jhp. $s a t a \eta^H$
< Shn. $s a^5 t a a \eta^4$ < WB. { $s a$ tang':} 'news, reputation'》 cf. Bur. $T a d i n^H$
 $s a \eta^{55} p^h o^{53}$ 'vessel, ship'. 《Jhp. $s a \eta^H p h o^H$ < Shn. $s^h a \eta^4 p^h o^4$ < WB. { $s a n g^h b h o$ } * 30
cf. Bur. $T i n^H b o^H$ 》
 $t'o \eta^{22} p a n^{22} a^{21}$ 'to apologize'. 《Jhp. $t o y^H b a n^L$ - < Shn. $t o \eta^4 p a a n^2$
< WB. { $t o n g$:pan'} 'to apologize, implore'》 cf. Bur. $t a u n^H p a n^L$ -
 $f r a^{22}$ 'teacher'. 《Jhp. $s a r a^M$, Shn. $s^h r a a^2$ < WB. { $c h a$ raa}》 cf. Bur. $s^h a y a^L$

C. 上記2つのいずれにも当てはまらない語彙 次の項目のランスー語・シャン語・ジンポー語形式では、母音は綴字転写に近いが、末子音はそうではない。

- (11) $y i^{22}$ - $p'u \eta^{53}$ 'pile, bucket'. [water* 31 -pile] 《WB. { $p u M$:}》 cf. Jhp. $p u \eta^L$ 'bucket',
Shn. $p u \eta^4$, Bur. $p o u n^H$

これらのランスー語他の形式は、ビルマ語に起こった $*-um > *-u \eta$ or $-un > -oun$ という音変化の中間段階の形式を借用したものであるのかもしれない。ジンポー語はシャン語形式を借用した可能性が高いと考えるが、絶対にそうであるとまでは言い切れない。一方、ランスー語はジンポー語形式を借用したと考えてはば間違いない。

次の2項目のランスー語・シャン語形式でも、母音は綴字転写に近いが、末子音はそうではない。

* 28 Lhs. $t'a^{22}$ - 'to put' は Lhv. $t'o^L$ -, Bur. $t^h a^H$ - WB. { $t h a a$:} と同源。

* 29 Lhs. $t j a^{21}$ - 'to exist' は Lhv. $t j o^{21}$ - と同源。

* 30 Myanmar Language Commission (1994, p.511) には、この語が Skt. $s a m+p o t a$ に由来すると記されている。しかし、(i) 第2音節の頭子音の出気の有無が一致しない、(ii) アーリア系言語の語彙がビルマ語に借用される際、もとの語の最終音節である開音節が脱落するのは、通例その前の音節が閉音節である場合に限られる（前の音節が開音節の場合、最終音節の母音のみが脱落する）、以上の理由から、上記の語源情報には疑問が残る。なお、ビルマ語の子音字 { $b h$ } は、一部の語彙で無声有気音 p^h を表記する。

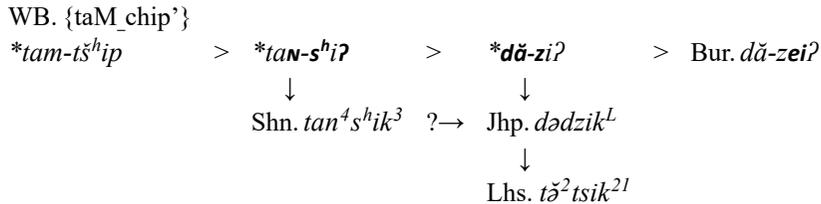
* 31 Lhs. $y i^{22}$ 'water' は Lhv. $y i t^F$, Bur. $y e^L$ WB. { $r e$ } と同源。

- (12) *nuk*^{53-a21} ‘to draw, subtract’. 《Shn. *nuk*³ < WB. {nut’}》 cf. Bur. *nou?*-
*pǎ²lik*²¹ ‘policeman’. 《Shn. *pǎ²lik*³ < WB. {pa_lip’}》 cf. Bur. *pǎlei?*

前者ではビルマ語に起こった **-ut* > **-u?* > *-ou?* という音変化の中間段階がシャン語に *-uk* として借用され、後者では **-ip* > **-i?* > *-ei?* という音変化の中間段階がシャン語に *-ik* として借用された。

次の項目では、シャン語形式およびジンポー語・ランスー語両形式が、それぞれビルマ語の音変化の異なる段階から借用を行ったと考えられる。

- (13) *tǎ²tsik*²¹ ‘stamp, seal’. 《Jhp. *dǎdzik*^L < WB. {taM_chip’}》 cf. Shn. *tan*⁴ *s^hik*³,
 Bur. *dǎzei?*



Kurabe (2016, p.32) は TB 祖語の **-k* がジンポー語では弱化して *-?* になったと述べる。そうすると、ジンポー語がこの語彙を借用したのは **-k* の弱化より後のことと考えるのが妥当である。しかしながら、ジンポー語がなぜビルマ語 **-?* を *-k* で受容したのかは謎として残る。ジンポー語のこの形式は、ビルマ語・シャン語両方の形式を参照したのかもしれない。

ジンポー語（およびランスー語）形式とシャン語形式が、ビルマ語の異なる段階に由来すると考えられる項目には、他に次のようなものがある。

- (14) *tʃe*⁵⁵ *tʃu*⁵⁵ ‘thank’. 《Jhp. *ce^Hju^H* < WB. {k-ye:juu:}》 cf. Shn. *kje*⁴ *tsu*⁴,
 Bur. *ce^Hzu^H*
*tʃǎ²rit*²¹ ‘food stuff’. 《Jhp. *jǎrit*^L ‘provisions for a journey, expenses while on the road’ < WB. {ca_rip’}》 cf. Shn. *tsa*² *rip*³, Bur. *zǎyei?*

3.3.3 ビルマ語・ジンポー語とのみ借用形式を共有する場合

ランスー語とジンポー語がビルマ語に関連づけられる形式を持つが、シャン語は持たないというケースも存在する。前節と同様、2類に分けられる。

A. 現代標準ビルマ語の音韻形式に似た形式を持つ語彙 ビルマ語からジンポー語への借用、およびジンポー語からランスー語への借用とも、比較的新しい時期に起こったと考えてよい。

- (15) 現代標準ビルマ語の音韻形式に似た形式を持つビルマ語からの借用語
*mji*²²*set*⁵³ *set*⁵³-*a*²¹ ‘to wear glasses’. 《Jhp. *myi*^L*set*^H *set*^H- [eyeglass + wear]
 (Jhp. *myi*^L ‘eye’; Jhp. *set*^H- ‘to wear’ < Bur. *s^heʔ*- WB. {*chak*} ‘to join’)》
*tat*⁵⁵*si*²² ‘gasoline’. 《Jhp. *dar*^H*si*^M < Bur. *daʔs^hi^L* WB. {*dhaat* ‘chii’}*32》
*tfoŋ*²¹ ‘school’. 《Jhp. *joŋ*^L < Bur. *cauN^H* WB. {*k-yong*’:} ‘temple, school’》

B. 綴字転写に似た形式を持つ語彙 本来シャン語にも存在したビルマ語由来の形式が失われたか、あるいはの A. グループの語彙が借用されたよりも前の段階でこれらの語彙を借用したかのいずれかである。

- (16) *k^hak*²¹-*a*²¹ ‘to be difficult’. 《Jhp. *khak*^H- < WB. {*khak*}》 cf. Bur. *k^heʔ*-
*loj*²¹-*a*²¹ ‘to be easy’. 《Jhp. *loy*^L- < WB. {*l-way*}》 cf. Bur. *lwe*^L-
*ǎ²p^hoj*⁵⁵ ‘group’. 《Jhp. *ʔəphoy*^H < WB. {*@a_ph-waY*}》 cf. Bur. *ʔǎp^hwe*^C
*sǎ²paj*⁵⁵ ‘desk’. 《Jhp. *səboy*^H < WB. {*caa_pwaY*}》 cf. Bur. *zǎbwe*^H
*səm*²¹*la*²² *soj*⁵⁵-*a*²¹ ‘to draw a picture’. 《Jhp. *sum*^L*la*^M ‘picture, figure, image’;
 Jhp. *soy*^H- ‘to draw’ < WB. {*chwaY*}》 cf. Bur. *s^hwe*^H-

3.4 ラワン語・トゥルン語

ごく少数であるが、チベット＝ビルマ系のヌン諸語に属するラワン語やトゥルン語からの借用の可能性のある語彙が見つかっている。ラワン語はカチンの構成民族の一つであるラワン人が話す言語であり、ラワン人の居住地域はロンウォー人の居住地域の北に位置する。ただ、ランスーの居住地域と隣接しているわけではないので、現時点では確かに借用関係があるとまでは言い切れない。ラワン語形式のソースとしては LaPolla (2003) を、トゥルン語形式のソースとしては LaPolla (1987) を、それぞれ用いた。

- (17) ラワン語・トゥルン語からの借用の可能性のある語彙
*mǎ²ʔop*⁵³-*si*²² ‘tomato’. [tomato-fruit] 《Rawang. *məup ei*⁵³》
*tʃ^huŋ*⁵³ ‘jar’. *yi*²²-*tʃ^huŋ*⁵³ ‘water pot’. [water-pot] 《Rawang. *tehɔŋ*⁵³》
*paj*²² ‘cage, basket’. 《Trung (Dulong). *pai*⁵⁵*kǎʔ*⁵⁵ ‘basket (bamboo, large)’》

3.5 漢語

漢語から借用語が少数確認されている。現時点では雲南方言のデータとの照合は行っていない。今後の課題としたい。

*32 WB. {*dhaat*} は Pali. *dhātu* ‘element’ に由来する語であるが、単音節化することで半ばビルマ語化してしまっていることと、後部要素 WB. {*chii*} ‘oil’ との一体性が強く、一まとまりとしてビルマ語からシャン語・ジンポー語に借用されたことから、この類に入れた。

- (18) 漢語から借用されたと考えられる語彙

ko²¹tse⁵⁵~ko²¹se⁵⁵ ‘chopsticks’. 《Jhp. *khoy^Mdze^L* < Chn. 筷子》

tsen²¹taw²¹ tsen²¹-a²¹ ‘to cut with scissors’. 《Jhp. *dzen^Ldaw^L* < Chn. 剪刀 ;
Jhp. *dzen^L* ‘to clip, shear, to cut out hair’ < Chn. 剪》

son²²-ju²²-a²¹ ‘to consider’. 《Jhp. *son^M*- ‘to calculate’ ? < Chn. 算 ; Jhp. *yu^M*- ‘to see’》

kwan²¹-a²¹ ‘to nurse’. 《?Chn. 观》

最後の語彙は、ジンポー語に対応する形式を持たない。漢語から直接借用されたものであるのか。

3.6 アーリア系言語

ビルマ語からの借用語のあるものは、さらに元をたどればパーリ語・サンスクリット語・ヒンディー語といったアーリア系言語に由来するものである。

- (19) パーリ語からビルマ語を経由してランスー語に入ったと考えられる語彙

kam²¹ ‘luck’. 《Jhp. *gam^L* < Shn. *kaam²* < WB. {kaM} < Pali. *kam*》 cf. Bur. *kan^L*

să²ti²¹ ju²¹-a²¹ ‘to promise’. [care + take] 《Jhp. *sădi^{2L}* ‘to be careful’
< Shn. *s^ha²ti⁵* ‘attention, caution’ < WB. {sa_tī} < Pali. *sati*》 cf. Bur. *Tădi^C*

tjak²¹ ‘machine’. 《Jhp. *jak^L* < Shn. *tsaak³* ‘wheel’ < WB. {cak} < Pali. *cak*》
cf. Bur. *se²*

jo⁵⁵ka²²-paw²¹ ‘bacteria’. [disease-germ^{*33}] 《Bur. *jo^Hga^L* WB. {ro_kaa}
< Pali. *rokā*》 cf. Shn. *jo⁴kaa²* ‘disease’

mje²²-ɔ⁵⁵tsa²² ‘manure’. [soil-nutrient] 《Bur. *mye^L* WB. {m=re} ‘soil’ ;
Bur. *ɔ^Hza^L* WB. {o_jaa} ‘nutrient’ < Pali. *ojā*》

- (20) サンスクリット語からビルマ語を経由してランスー語に入ったと考えられる語彙

nă²muk²¹tă²ra²² ‘ocean’.^{*34} 《Jhp. *nam^Lmuk^Mdəra^M* < Shn. *nam⁵* ‘water’ ;
Shn. (*s^ham²*)*muk³tra²* < WB. {sa_mud=da_raa} ‘ocean’ < Skt. *samudra*》
cf. Bur. *Tămouɔdăya^L*

na²²ji²² ‘o’clock; clock, watch’. 《Bur. *na^Lyi^L* WB. {naa_rii} < Skt. *nāḍī^{*35}* ‘a
measure of time equal to 24 minutes’》

^{*33} Lhs. *paw²¹* ‘germ’ は Lhv. *puk^L*, Bur. *po^H* WB. {pui;} と同源。

^{*34} 興味深いことに、直接の借用元と考えられるジンポー語の形式はサンスクリット起源のシャン語語彙 *s^ham²muk³tra²* の第1音節をシャン語の固有語である *nam⁵* で置き換えたものになっている。

^{*35} WB. {naa_rii} の初出は、調べた限り緬暦 611 年 (=AD1249) の記年があるビルマ語碑文 5 本に現れる {naa_rii/naa_ri/na_ri} である。これより早く、緬暦 527 年 (=AD1165) の記年があるビルマ語碑文に {na_Dii} が現れる。また、Shorto のモン語碑文辞典は、12 世紀初頭に刻まれたとされるモン語碑文『大王宮碑文 The Great Palace Inscription』に現れる {naa_Dii} の用例を挙げている。いずれの

- (21) ヒンディー語からビルマ語を経由してランスー語に入ったと考えられる語彙
mo²²tsa²² ‘socks’. 《Jhp. *mo^Mdza^M* < Bur. *mɔ^Lza^L* < Hindi. *mojā*》
p[’]ja²²t[’]a²² ‘policeman, constable’. 《Jhp. *bya^Mda^M* < Shn. *pjaa²taa²*
 < Bur. *pya^Lta^L* WB. {p-raa_taa} ‘office boy, messenger’ < Hindi. *pyādā*》

3.7 英語

ビルマが英領植民地となった関係で、ヨーロッパから渡来した文物の名称などの英語語彙がビルマ語に入り、そこから少数民族言語にも受容されている。

3.7.1 英語 → ビルマ語 → ランスー語

- (22) *ho²²te²²* ‘hotel’. 《Bur. *ho^Lte^L* WB. {hui_tay’} < Eng. *hotel*》
ko²²p^hji²² ‘coffee’. 《Bur. *ko^Lp^hi^L* WB. {ko_phii} < Eng. *coffee*》
k[’]at⁵⁵p[’]ja⁵⁵ ‘card’. 《Bur. *ka[?]* WB. {kat’} < Eng. *card*; Bur. *pya^H* WB. {p-raa:} ‘to be flat’》
mă[?]ni[?]55 ‘minute’. 《Bur. *mi^Cni[?]* < Eng. *minute*》 cf. Jhp. *məni^H*
re²²ti²²jo²² ‘radio, wireless’. 《Bur. *re^Ldi^Lyo^L* WB. {re_dii_yui} < Eng. *radio*》
se[?]55kan²² ‘second’. 《Bur. *se[?]kan^C* WB. {cak=kan’} < Eng. *second*》
 cf. Jhp. *tsek^Lkan^M*
p^hoŋ²²tin²² ‘fountain pen’. 《Bur. *p^haun^Ltein^L* WB. {phong’tin’} < Eng. *fountain*》
fuj⁵⁵ ‘telephone’. 《Bur. *p^houn^H* ~ *foun^H* WB. {phun’:} < Eng. *(tele)phone*》
 cf. Shn. *p^hon⁴*

p^hoŋ²²tin²² は綴字転写に近い形式を取っている。また、*fuj⁵⁵* については (11) の *yi²²-p[’]uj⁵³* ‘pile, bucket’ と同じパターンを示している。標準ビルマ語の音韻形式が二重母音 + -N を持つ場合については、さらに考察が必要であろう。

3.7.2 英語 → ビルマ語 → ジンポー語 → ランスー語

- (23) *mo²²to²²k[’]a⁵⁵* ‘car’. 《Jhp. *mo^Ldo^Lka^H* < Bur. *mɔ^Ltɔ^Lka^H* WB. {mo’to’kaa:} < Eng. *motorcar*》

例も、碑文に記された事績の占星術的時刻を表すという共通の文脈で数詞を伴って現れているため、上記諸碑文に現れるビルマ語の {na(a)_ri(i)/na_Dii} およびモン語の {naa_Dii} は同義であるとみなし得る。あるいは WB. {naa_rii} は 12 世紀モン語経由で借用されたのかもしれないが、確かなことはわからない。いずれにせよ、{D}→{r} の変化は、これらの子音字がいずれも伝統的パーリ語文法で (反)舌音 (lingual/cerebral/retroflex) を表す字として分類されることを考えると妥当な変化である。

*nam*²²*pat*⁵⁵-*ta*²-*k'u*⁵⁵ 'first'. [number-one-CLF] 《Jhp. *nam*^M*bat*^H < Bur. *naN*^L*baʔ*^{*36} WB. {naM_paat'} < Eng. *number*》

4 借用によってもたらされた音韻単位

これまで見てきた借用語では、ランスー語そのものや媒介言語の固有語の音韻論に整合するような調整を経て借用される例が多かった。しかしながら、時には借用によって新しい音韻単位がもたらされることがある。本節では借用によってもたらされた頭子音・頭子音連続・韻について観察を行う。

4.1 頭子音・頭子音連続

4.1.1 *r*

ビルマ文字の子音字 {r} が本来表した頭子音は **r* であると推定されるが、それに対応するランスー語の頭子音は *y* である。すなわち、ランスー語の *r* は全て借用、とりわけジンポー語からの借用によってもたらされたものであると言える。

- (24) *ǎ*²*roj*²² *tʃa*^{ʔ21}-*a*²¹ 'to be honorable'. [honour + exist] 《Jhp. *əroj*^M 'honour, renown, reputation'》
k^h*ən*²²*ru*²¹*roj*²² 'shellfish'. 《Jhp. *khin*^M*ru*^L*roj*^L 'spiral snail'》
*kǎ*²*ru*²¹-*a*²¹ 'to be noisy, to scold'. 《Jhp. *gəru*^L-》
*mji*²²-*si*⁵⁵-*raj*⁵⁵ 'pottery, china, porcelain'. [soil^{*37}-make-thing] 《Jhp. *ray*^H 'thing'》
*rin*⁵⁵-*tʃ*^h*aŋ*²², *rin*⁵⁵-*t*^h*əm*⁵⁵ 'mortar'. [grind-?], [glind-mortar^{*38}] 《Jhp. *rin*^H 'to grind'》

4.1.2 *ts/ts'*

ランスー語の固有語では、他の北部ビルマ諸語の破擦音 *ts/ts' / tʃ/ tʃʰ* が閉鎖音 *t/t' / tʰ* に合流した。ゆえにランスー語の *ts/ts'* も全て借用語に由来するものである。借用元の言語はジンポー語が多いが、さらに漢語やアーリア系言語に遡れる語彙もある。

- (25) *ts*
*tsaw*²¹*n'i*²¹ 'deer'. 《Jhp. *dzaw*^L*nyi*^L》

*36 標準ビルマ語の音韻形式がなぜ語源にない声門閉鎖末子音を伴うのかは謎である。ついですが、綴字 WB. {-aat'} もビルマ語固有語には見られないものである。標準ビルマ語の韻に長短の対立はないが、音声的には声門閉鎖末子音を伴う韻が最も短く聞こえ、声調 *L, H* を持つ音節の韻が最も長く聞こえる。英語の *-er* の雰囲気を残すために、長く聞こえる Bur. *-a^L* の表記 WB. {-aa} をわざわざ綴字で用いているのかもしれない。

*37 Lhs. *mji*²² 'soil' は Lhv. *mjit*^F, Bur. *mye*^L WB. {m-re} と同源。

*38 Lhs. *t^həm*⁵⁵ 'mortar' は Lhv. *ts^ham*⁵⁵, Bur. *s^houN*^L WB. {chuM} と同源。

tsim²¹-a²¹ ‘to calm, quiet; keep quiet; gentle, mild’. 《Jhp. *dzim^L*- ‘to be quiet’》
tsun²¹loŋ²² ‘island’. 《Jhp. *tsun^Lloŋ^M*, *dzin^Lloŋ^M*, *dzun^Lloŋ^M*》
tsəŋ²²ret⁵³ ‘saw’. 《Jhp. *dziŋ^Lret^L*, *tsiŋ^Lret^L* ‘saw’》
ko²¹tse⁵⁵~ko²¹se⁵⁵ ‘chopsticks’. 《Jhp. *khoy^Mdze^L* < Chn. 筷子》
tsen²¹taw²¹tsen²¹-a²¹ ‘to cut with scissors’. 《Jhp. *dzen^Ldaw^L* < Chn. 剪刀 ;
 Jhp. *dzen^L*- ‘to clip, shear, to cut out hair’ < Chn. 剪》
mo²²tsa²² ‘socks’. 《Jhp. *mo^Mdza^M* < Bur. *mɔ^Lza^L* < Hindi. *mojā*》

- (26) **ts’**
k^hɔ̃²ts’u⁵³t’u⁵⁵ ‘prawn’. 《Jhp. *khətsu^F*》
mə̃²ts’iŋ²²-p^ha²² ‘mark’. 《Jhp. *mətsiŋ^M* ‘to note, mark, keep in mind’ ; Jhp. *pha^M*
 ‘RELATIVE CLAUSE FORMATIVE’》
ts’əŋ²¹-a²¹ ‘to be worried’. 《Jhp. *tsəŋ^L*-》
ts’i²¹ts’i²¹-a²¹ ‘to heal, cure’. 《Jhp. *tsi^L* ‘medicine’》
ts’om²¹-a²¹ ‘to be smooth’. 《Jhp. *tsom^L*-》

4.1.3 *ŋ*

ランスー語の固有語では、他の北部ビルマ諸語の鼻音 *ŋ* が *n* に合流した。*ŋ* の例は今のところ次の1例しか見つかっていない。

- (27) **neŋ²¹mun²²** ‘moustache’. 《Jhp. *niŋ^Lmun^M* ‘beard’》

4.1.4 C-r

ジンポー語で頭子音連続 C-r を持つ語彙がランスー語に借用される場合、多くは C-j として受容される。しかしながら、C-r のまま受容される例が2例見つかっている。

- (28) **xəŋ²¹-kran⁵⁵-la⁵⁵-a²¹** ‘to leave, go away’. [parted-parted-go*³⁹] 《Jhp. *kha^ŋ* ‘to be parted, separated’ ; Jhp. *kran^H*- ‘to be apart or parted, to be obviously isolated or separated’》
kəm²¹mraŋ²¹ ‘horse’. 《non-std.Jhp. *gum^L(m)raŋ^L*. cf. std.Jhp. *gum^Lra^L*》

4.2 末子音を伴う韻

4.2.1 母音 *i* を持つもの

ランスー語固有語に現れるのは *in*, *it* だけである。それ以外のうち *im*, *ip*, *ij*, *i?* は借用によってもたらされた。なお、-w, -j は *i* と結びつかない。

*³⁹ Lhs. *la⁵⁵*- ‘to go’ は Lhv. *lo^H*- と同源。

- (29) *im*
tsim^{21-a²¹} ‘to calm, quiet; keep quiet; gentle, mild’. 《Jhp. *dzim*^{L-} ‘to be quiet’》
nam^{21-tf'im}⁵⁵ ‘taste, flavor’. 《Jhp. *nam*^L ‘taste, flavor’ ; Jhp. *cim*^H < Shn. *tsim*⁴
‘v. taste’》
- (30) *ip*
*fəŋ*²¹**nip**²¹ ‘shadow, shade’. 《Jhp. *eiŋ*^L*nip*^L》
- (31) *ij*
mə²**ts'ij**^{22-t'a²²-a²¹} ‘to specify’. [mark-put] 《Jhp. *mətsij*^{M-}》
tiŋ^{22-a²¹} ‘to be straight’. 《Jhp. *diŋ*^{M-}》
- (32) *iʔ*
tɪ²¹*tam*²¹ ‘frying pan’. 《Jhp. *di*^{ʔL}*dam*^L ‘a broad, shallow pot’》
sə²**tɪ**²¹*ju*^{21-a²¹} ‘to promise’. 《Jhp. *sədi*^{ʔL-} ‘to be careful’ < Shn. *s^ha²ti*⁵
‘attention, caution’ < WB. {sa ti} < Pali *sati*》 cf. Bur. *Tădi*^C
mă²**ni**^ʔ⁵⁵ ‘minute’. 《Bur. *mi*^C*ni*^ʔ < Eng. *minute*》 cf. Jhp. *mənit*^H
- (33) *ik*
*kaj*²¹-**tik**⁵³ ‘the best’. [good^{*40}-SUPERLATIVE] 《Jhp. *dik*^L》

4.2.2 母音 *e* を持つもの

ランスー語の固有語では、*e* は開音節にしか現れない。ゆえに *e* が末子音を伴ってできる全ての韻は借用起源である。

- (34) *em*
t'em^{21-si²² mu²¹-a²¹} ‘to be tender, gentle’. [tender + do] 《Jhp. *tem*^L*si*^{L-} ‘to be
sober, calm, serious’》
- (35) *ep*
rep^{21-a²¹} ‘to cut with scissors’. 《Jhp. *rep*^{L-} ‘to clip, cut, shear’》
tfep^{21-yu²²-a²¹} ‘to inquire into, investigate’. [inquire-look^{*41}] 《Jhp. *jep*^{L-} ‘to
inquire or investigate’》
- (36) *en*
p^hjen²² ‘enemy, foe’. 《Jhp. *phyen*^M ‘enemy’》
t^haw^{22-k^hjen²²-k'at⁵⁵-a²¹} ‘to thrust, dab’. [thrust-pierce-put.in^{*42}] 《Jhp. *khren*^{M-}
‘to pierce through’》

*40 Lhs. *kaj*²¹⁻ ‘to be good’ は Lhv. *kaj*^{F-} と同源。

*41 Lhs. *yu*²²⁻ ‘to look’ は Lhv. *yu*⁵⁵⁻ と同源と思われる。

*42 Lhs. *t^haw*²²⁻ ‘to thrust’ は Lhv. *t^huk*^{H-}, Bur. *t^ho*^{H-} WB. {thui:} と同源。Lhs. *k'at*⁵⁵⁻ ‘to put in’ は Lhv. *k'e*^{ʔH-} と同源。

*jen*²²-*a*²¹ ‘to weigh’. 《Jhp. *ɛen*^M-》

*ʃə*²*tʃ'en*⁵³-*a*²¹ ‘to introduce’. 《Jhp. *ɛəcen*^L-》

(37) *et*

*mə*²*kʰjet*²¹ ‘line’. 《Jhp. *məkhret*^L》

*tsəŋ*²²*ret*⁵³ ‘saw’. 《Jhp. *dziŋ*^L*ret*^L, *tsiŋ*^L*ret*^L ‘saw’》

(38) *eŋ*

*n*²*seŋ*⁵⁵ *ǎ*²-*kʰjak*⁵³-*su*²¹ ‘(voice) to be sharp, shrill’. [voice + not-well]

《Jhp. *n*^L*sen*^H- ‘sound, voice’ ; Jhp. *khvak*^H ‘well, correctly, appropriately, exactly’》

*san*²¹*seŋ*⁵⁵-*a*²¹ ‘to be clean’. 《Jhp. *san*^L*seŋ*^H-》

*t'eŋ*²¹*man*²²-*a*²¹ ‘to be honest’. 《Jhp. *teŋ*^L*man*^M- ‘to be truthful, honest’》

*leŋ*²¹ ‘vehicle’. 《Jhp. *leŋ*^L < Shn. *leŋ*²》

*kʰa*²¹*reŋ*⁵³ ‘wave’. 《Jhp. *kha*²*leŋ*^H < Shn. *leŋ*⁴ < WB. {l-huing':}》

(39) *e?*

*tʰe?*⁵³-*a*²¹ ‘to be hot’. 《Jhp. *the?*^H-》

*kʰaj*²²*pʰje?*⁵³ ‘duck’. 《Jhp. *khay*^M ‘bird’ < Shn. *kaj*² ‘fowl’ ; Jhp. *pyek*^H < Shn. *pet*⁴ ‘duck’》

*se?*⁵⁵*kan*²² ‘second’. 《Bur. *se?**kan*^C WB. {cak-kan'.} < Eng. *second*》

cf. Jhp. *tsek*^L*kan*^M

ek だけは今のところ見つかっていない。

4.2.3 *ak*

ランスー語の母音の中で、*a* は固有語において最も多くの末子音と結びつく母音である。唯一結びつかないのが *-k* である。

(40) *ǎ*²*sak*²¹ *ŋaj*²¹-*a*²¹ ‘to be young’. [age + small*⁴³] 《Jhp. *asak*^L ‘age’》

*kʰjak*⁵³ *ŋ'ət*⁵³-*na*²¹ ‘to be convenient’. [appropriately + COPULA] 《Jhp. *khvak*^H》

*lak*²¹*laj*⁵⁵-*a*²¹ ‘to be rare, novel, curious’. 《Jhp. *lak*^L*lay*^H- ‘to differ from, be peculiar or unique’》

*jak*²¹-*a*²¹ ‘to be difficult’. 《Jhp. *yak*^M- ‘difficult’ < Shn. *jaak*³》

*lak*²¹*nak*²¹ ‘arms, weapon’. 《Jhp. *lak*^L*nak*^L < Shn. *laak*³*naak*³ < WB. {lak'nak'}》

*tʃak*²¹ ‘machine’. 《Jhp. *jak*^L < Shn. *tsaak*³ ‘wheel’ < WB. {cak'} < Pali. *cak*》

cf. Bur. *se?*

*⁴³ Lhs. *ŋaj*²¹- ‘to be small’ は Lhv. *ŋaj*^F-, Bur. *ŋe*^L- WB. {ngay'} と同源。

$n^2se\eta^{55} \check{a}^2-k^hjak^{53}-su^{21}$ '(voice) to be sharp, shrill'. [voice + not-well]
 《Jhp. n^Lsen^H - 'sound, voice' ; Jhp. $khra^k^H$ 'well, correctly, appropriately, exactly'》

4.2.4 母音 *o* を持つもの

固有語には *om*, *op*, *oj*, *oʔ* が現れる。*oj*, *on*, *ot*, *ok* が借用によってもたらされたものである。この中で特に *oj* と *on* がよく見られる。なお、*o* は *-w* とは結びつかない。

(41) *oj*

$k^{\check{a}^2}n^{\check{o}j}^{22}$ 'rubber, india-rubber'. 《Jhp. $kə\eta noy^M$ 》
 $k^h o j^{21}-ju^{21}-a^{21}$ 'to borrow [money]'. 《Jhp. $khoy^M-$ 》
 $nə\eta^{22}t^h o j^{53}$ 'day, light'. 《Jhp. $nij^H thoy^H$ 》
 $p^{\check{o}j}^{55}$ 'feast, festival, social events in general'. 《Jhp. poy^H 》
 $loj^{21}-a^{21}$ 'to be easy'. 《Jhp. loy^L - < WB. {l-way'} 》 cf. Bur. $lwε^L-$

(42) *on*

$jon^{22}-a^{21}$ 'to grieve, be sad'. 《Jhp. yon^L- 》
 $m\check{a}^2k^hon^{55} k^hon^{55}-a^{21}$ 'to sing'. 《Jhp. $m\check{a}khon^H$ 'song' ; Jhp. $khon^H-$ 'to sing'》
 $to\eta^{21}k^hon^{22}$ 'banner, flag'. 《Jhp. $do\eta^L khon^L$ 》
 $tjon^{21}-a^{21}$ 'to ride, mount'. 《Jhp. jon^L- 'to ride (something)'》
 $f\check{a}^2ton^{55}-a^{21}$ 'to measure'. 《Jhp. $\epsilon\check{a}don^H-$ 》
 $na^{21}tjon^{22}$ 'plough'. 《Jhp. na^L < Shn. naa^4 'rice field' ; Jhp. jon^M 'to dig out' < Shn. $ts\check{o}n^5$ 》
 $son^{21}-ju^{22}-a^{21}$ 'to consider'. 《Jhp. son^M- 'to calculate' ? < Chn. 算; Jhp. yu^M- 'to see'》

(43) *ot*

$t^h o t^{21}-a^{21}$ 'to move'. 《Jhp. $thot^L-$ 》

(44) *ok*

$(la^{21})kok^{21}-a^{21}$ '(tiger) to bark'. 《Jhp. gok^M- 》

4.2.5 *uk*

母音 *u* は *-w*, *-j* 以外の末子音と結びつく。母音 *u* を持つ韻の中で唯一ランサー語固有語に現れないのが *uk* である。

(45) $t^huk^{53}-a^{21}$ 'to suit, fit'. 《Jhp. $thuk^H-$ 》

$fuk^{53}-a^{21}$ 'to be complex, complicated'. 《Jhp. ϵuk^H- 'messy'》
 $nuk^{53}-a^{21}$ 'to draw, subtract'. 《Shn. nuk^3 < WB. {nut'} 》 cf. Bur. $nou^?$

4.2.6 əʔ

母音 ə も -w, -j 以外の末子音と結びつく。母音 ə を持つ韻の中で唯一ランスー語固有語に現れないのが əʔ である。

- (46) *məʔ²¹* ‘cloud’. 《non-std.Jhp. *muʔ^L*-‘to be cloudy’. cf. std.Jhp. *muŋ^M*》

4.2.7 awŋ

ビルマ語からの借用語に 1 例だけ確認された。oŋ の異音に過ぎない可能性がある。

- (47) *ǎ²k^hun²² sawŋ²²-a²¹* ‘to pay tax’. 《Bur. *ʔǎk^hun^L* WB. {*@a_kh-wan*} ‘tax’ ;
Bur. *s^hauN^L*- WB. {*chong*} ‘to carry out’》

おわりに

本稿では、ビルマ語群北下位語群に属する少数言語ランスー語の借用語について、借用の経路とランスー語の音韻論にもたらした影響に焦点を当てて考察した。

ある語彙が借用語であるかどうかの判断は難しい。一つには、その言語の体系の中に定着したと言えるかどうかの判断の問題がある。動詞の場合、ランスー語固有語の動詞と同じ文助詞のセットを接続できることが、ランスー語の体系の中に定着していることの証拠であるとみなせるが、名詞の場合にも同様の根拠を提出できるかどうかは定かでない。

もう一つ、系統の近い言語間の接触が絶えず起こる状況では、言語 A と言語 B にみられる似通った形式が、同源であるためなのかそれとも借用の結果なのかを判断することが難しいという点が挙げられる。本稿の取り扱う範囲では、特にランスー語とビルマ語の間の関係にそのことが当てはまる。例えば、ランスー語の *k^ham²²*- ‘to suffer, endure’ は Bur. *k^haN^L*- WB. {*kham*} の同源形式であるとも、借用であるともみなし得る。

借用語であると判断できたとして、その経路の特定も難しい問題である。ビルマ語・シャン語・ジンポー語・ランスー語が形式的にも意味的にも近い語彙を共有する場合、民族歴史的背景をかながみて、ビルマ語 → シャン語 → ジンポー語 → ランスー語という借用経路を考えがちである。このような借用経路は比較的妥当性が高いものであるとは思いますが、それが必ずしも真であるとは限らない。シャン語とジンポー語がビルマ語から別個に借用した可能性も排除すべきではないし、ランスー語がジンポー語を経由せずビルマ語から借用する可能性は、かえって最近になって増えてきているであろう。個々の言語の音韻体系を勘案しつつ引き続き精密な観察を行う必要がある。さらに、周辺同系言語における借用も視野に入れることで、この地域の言語状況に関するより深い知見を得ることに努めたい。

謝辞

本論文は、下記の研究プロジェクトによる共同研究の成果であり、これらのプロジェクトの支援を受けている。

- ・「混成言語」から見なおすユーラシアの諸言語—言語接触と言語形成の類型を探る—（科学研究費補助金 基盤研究 (B), 代表者：藤代節 神戸市看護大学教授, 2016–2018 年度)
- ・ビルマの危機言語に関する緊急調査研究（科学研究費補助金 基盤研究 (B), 代表者：倉部慶太 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教, 2017–2019 年度)
- ・印・緬・中国西南部山地地域の民族言語的接触：移住経路・文化的相互作用・言語への影響（日本学術振興会とシンガポール国立大学との二国間交流事業 共同研究, 代表者：澤田英夫, 2019–2020 年度)
- ・言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開（文部科学省特別経費：代表者：中山俊秀 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授, 2013–2015 年度)

参考文献

- Bradley, David (2011) “Changes in Burmese phonology and orthography,” Plenary talk at SEALS XXI (Southeast Asian Linguistics Society). Bangkok, Thailand.
- Kurabe, Keita (2016) “A grammar of Jinghpaw, from northern Burma,” Ph.D. dissertation, Kyoto University.
- (2017) “A classified lexicon of Shan loanwords in Jinghpaw,” *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)*, Vol. 11, pp. 99–131, [URL: <http://hdl.handle.net/10108/89212>].
- (2018) “A classified lexicon of Jinghpaw loanwords in Kachin languages,” *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)*, Vol. 12, pp. 99–131, [URL: <http://hdl.handle.net/10108/91146>].
- LaPolla, Randy J. (1987) “Dulong and Proto-Tibeto-Burman,” electronic data, accessed via STEDT database <https://stedt.berkeley.edu/search/> on 2020-01-28.
- (2003) “Rawang glossary,” electronic data, accessed via STEDT database <https://stedt.berkeley.edu/search/> on 2020-01-28.
- Lhaovo Littero-Cultural Committee (undated) “A short information about Lhaovo people.”
- Li, Fang Kuei (1977) *A Handbook of Comparative Tai*: The University Press of Hawaii.
- Maran, La Raw (1979) “A dictionary of modern spoken Jingpho,” unpublished ms.
- Myanmar Information Management Unit (MIMU) (15 SEP 2017) “Myanmar Place Codes Release-VIII.i,” <http://themimu.info/place-codes/>.
- Myanmar Language Commission ed. (1994) *Myanmar-English Dictionary*: Yangon: Department of the Myanmar Language Commission, Ministry of Education, Union of Myanmar.
- Okell, John (1969) *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*, 2 vols.: London: Oxford University Press.
- Sawada, Hideo (1999) “Outline of phonology of Lhaovo (Maru) of Kachin State,” in *Linguistic and Anthropological Study on the Shan Culture Area, report of research project, Grant-in-Aid for International Scientific Research (Field Research)*, pp. 97–147.
- (2018) “The phonology of Lhangsu, an undescribed Northern-Burmish language,” in Osaki, Noriko, Yasuhiro Kishida, Tomoyuki Kubo, Mutsumi Sugahara, Tooru Hayasi, and Setsu Fujishiro eds. *Dynamics in Eurasian Languages, (Contribution to the Studies of Eurasian Languages series)*, Vol. 20: Kobe City College of Nursing, pp. 381–404, [The 20th Commemorative Volume Dedicated to Prof. Dr. Masahiro Shōgaito] [URL: http://e1.kobe-ccn.ac.jp/cse1/?page_id=539].
- SEALang Library (2008) “Shan Dictionary Resources,” <http://sealang.net/shan/>, accessed on 2019-09-02.
- 澤田英夫 (2011) 「カチン州のタイ系起源地名覚え書き」, 藤代 節 (編) 『ユーラシア諸言語の動態 II』, Kobe City College of Nursing, pp. 127–152.
- 新谷 忠彦 (2000) 『シャン (Tay) 語音韻論と文字法』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 戴 慶厦 (2005) 『浪速語研究』, 中国新發現語言研究叢書, 北京: 民族出版社.
- 西田 龍雄 (1961) 「十六世紀におけるバイ・イ語—漢語、漢語—バイ・イ語單語集の研究」, 『東洋学報』, 第 43-3 卷, pp. 1–48.
- 北京大学東方語言文学系緬甸語研究室 (編) (1990) 『緬漢詞典』, 商務印書館.

On Borrowed Words in Lhangsu, an Undescribed Northern-Burmish Language

SAWADA, Hideo

‘Lhangsu’ is the name of a subgroup of Lhaovo, a tribe constituting Kachin ethno-cultural group, and their language. Lhangsu people speak the language fairly different from Standard Lhaovo. Due to their ethno-geographical environment, Lhangsu has borrowed a lot of vocabularies from Jinghpaw, and also from Shan, Burmese and a few other languages, presumably via Jinghpaw in many cases. I guess that the degree the language has accepted loanwords is far higher than that of Standard Lhaovo.

In this paper, I give an overview of loanwords in Lhangsu from the viewpoints such as path of borrowing and their effects on the phonemic inventory of the language.